

9/25

## 美味しい餅米が待ち遠しい

石上小学校 稲刈り体験



石上小学校で、4月に田植えをした稲<sup>いしがみもち</sup>を刈り取る稲刈り体験が行われました。

全校児童が地域の方々や保護者の方々の協力のもと、かまの使い方などを教わりながら稲刈りを行いました。

高学年の児童たちが見本を見せながら、全員で協力して稲を刈り、刈り取った稲をばさ掛けしました。

太陽の光をたっぷり浴びて乾燥させ、秋の実りに感謝しながらいただく、美味しい餅米が待ち遠しいですね。

9/27

## 自然災害に備えて

大田原市防災訓練の実施



自然災害による被害を減らすためには、一人ひとりが「自らの命は自らが守る」という意識を持つことが重要です。この意識を醸成するため、市では毎年、市民と協働し、災害対策基本法に基づいた防災訓練を実施しています。

今年度は須賀川地区を対象とし、よいちメールや防災行政無線で避難情報などの発信を行い、須賀川上・中・下自主防災会による避難所運営訓練や防災倉庫点検、消防団による水害時の土のう作成・積上げ訓練などを実施しました。

ご協力ありがとうございました。

10/3

## 壮行会を開催しました

第37回全国健康福祉祭(ねりんピック)ぎふ大会



市役所本庁舎3階の301・302会議室にて、第37回全国健康福祉祭(ねりんピック)ぎふ大会の出場者壮行会が開催されました。

栃木県代表団に、大田原市から4種目(ソフトボール、グラウンド・ゴルフ、サッカー、美術展・工芸)6名の皆さまが選出されました。

大会中の健康と活躍、地域間の交流が深まることを祈念し、相馬市長が激励の言葉を贈りました。

ねりんピックでのご活躍を期待しています。

10/3

## 組紐体験で歴史と文化に触れる

黒羽小学校 大関組紐体験



黒羽小学校にて、大田原市観光協会による大関組紐体験が行われ、6年生の児童たちが、ブレスレットを制作しました。

大関組紐は、黒羽藩ゆかりの組紐で、古くから、<sup>かつらぎ</sup>甲冑などの武具に多く使われていました。

児童たちははじめ、準備や紐を組む作業に悪戦苦闘していましたが、組んでいくうちに段々とコツを掴み、上手に編み上げることができました。

大関組紐を通じて、地域の歴史や文化に触れる貴重な体験となりました。



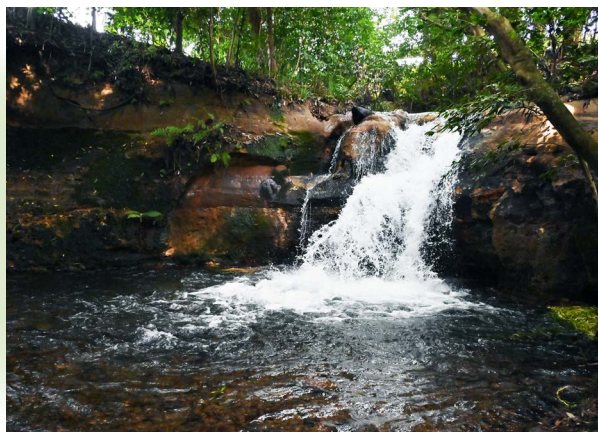
## 『不動の滝』

撮影場所：滝沢

投稿者：金田北中学校 2年 高野 紗由

この写真は、滝沢の不動の滝で撮影しました。  
滝の勢いや美しさをそのまま撮影できるように、  
撮る角度や明るさを調整するなどの工夫をしました。  
私は初めて一眼カメラを使いました。撮影は難  
しかったけれど、きれいな滝の勢いが感じられる  
写真が撮れて嬉しかったです。

※職場体験「わくわくチャレンジウィーク」で市役所に来て  
いた金田北中学校の生徒が撮影しました。



## 『団地夕景』

撮影場所：薄葉第二団地上空

投稿者：散歩人

野球のクライマックス・シリーズ  
をテレビ観戦していたら、空  
が真っ赤に。  
慌ててカメラを持ち出し撮  
影しました。



# 「明治のナイチンゲール」大関和をたどる 閩文化振興課 本4階 TEL 0287-23-3135

## 第4回 医療の発展に尽力した人々

本市出身の大関和(1858-1932)は、正規の訓練を受けた看護師(トレインドナース)として多くの功績を残した「日本の看護師の先駆者」といえます。現在、黒羽芭蕉の館では、企画展「明治のナイチンゲール大関和のふるさと黒羽と医療」を開催しており、和が生まれ育った黒羽の景観や文化的風土と共に、幕末維新期の黒羽の医療の一端についても紹介しています。今回は、同展示では取り上げられていない本市出身で医療の発展に尽力した人物を紹介したいと思います。

まずは江戸時代の儒学者・諸葛琴台(1748-1810)です。琴台は寛延元年(1748)に下蛭田村(現蛭田)に生まれました。幼いころより学問に励み、儒学者として多くの著書を残した琴台ですが、下野国内で初めての解剖に携わったことでも知られています。琴台の監督による解剖は、寛政年間(1789-1801)に日光で行われ、その様子は『解屍新編』としてまとめられました。

次に、種痘の普及に尽力した北城諒斎(1822-91)です。種痘とは天然痘という感染症をワクチン接種によって予防する方法です。このおかげで天然痘は、現在人類が地球上から撲滅できた唯一の感染症となりました。天然痘ワクチンは、寛政8年(1796)にイギリスの医師エドワード・ジェンナーによって開発され、日本では嘉永2年(1849)に国内で種痘が成功し、各地で実施されるようになりました。大田原では嘉永4年(1851)、諒斎によって実施されたのが初めとなります。

諒斎は文政5年(1822)、大田原藩医を務める家に生まれ、24歳の時に江戸に行き西洋医学を学びます。帰郷後は父の跡を継ぎ大田原藩の侍医となりますが、嘉永2年に再び江戸に行き、種痘について学びました。当時はまだ西洋医学の知識も浸透しておらず、病気がまじないで治ると信じる人もいた時代で、ワクチン接種に抵抗を示す人も多かったようです。そのような中であって諒斎は、那須地方で種痘に尽力し、多くの人を救いました。



小泉斐画・諸葛琴台賛  
「男体山・中禅寺湖・華嚴滝図」  
(黒羽芭蕉の館蔵)